

5月27日(日) 16:55~17:35 第一分科会:九州国立博物館ミュージアムホール

1940年代初頭のニューヨークとマックス・エルンスト
—《Vox Angelica》(1943年)をめぐって—

九州大学 石井 祐子
ISHII Yuko

1941年、マックス・エルンスト(1891~1976)はフランスからアメリカへと亡命する。居を構えたニューヨークの地で「他者との出遭い」や文化的混淆の直中へと投げ入れられる経験をしたエルンストは、1943年に《Vox Angelica》という特異な作品を制作する。本作品については、これまでシュピースやホプキンスらによって包括的な考察がなされてきたが、亡命直後のニューヨークでの作品展示や受容のあり方との関係は十分に論じられてこなかった。そこで本発表は、作品の同時代的意味を明らかにする試みとして、主にこの時期同地で開かれた展覧会をめぐる企画や展示、受容の問題を検討し、《Vox Angelica》をそれらとの関わりから考察する。

本発表で特に注目するのは、42年にエルンストが関わった「シュルレアリズムの第一申請書(First Papers of Surrealism)」展と「今世紀の芸術(Art of This Century)」画廊の展示をめぐる問題である。前者はブルトンの教条的な「シュルレアリズム」とアメリカでの受容のあり方のズれを、後者はその歴史化と作品の見せ物化・商品化を露呈していた。「対アメリカ」「対抽象」といった、ヨーロッパでとは違った枠組みで作品が寄せ集められ、ときにコンテクストを捨象されて消費文化へと吸収されていく中で、エルンストは自身が「見る」主体であると同時に「見られる」対象であることを強く意識することになったと思われる。

こうした一連の状況は、《Vox Angelica》で自己の作品をカタログとして提示するという手法をもたらしたと考えられる。本作品は、画面が幾何学的グリッドによって分割され、各区画にエルンストがそれまでに扱ったモティーフやテクニックによるイメージの数々が一覧表のように集合・並置されている。発表者はこれまで、こうした画面構成を40年代シュルレアリズムの「新しい神話」や集合絵画という側面から考察してきた。それらの問題をこの時期のエルンストをめぐる諸状況から再考すると、mondrianやchesを想起させるグリッドというフォーマットそれ自体が、一種の広告的手法としての機能や、相関関係のなかで意味を生成・変容させる機能を帯びていたことが分かる。上述のような作品展示の問題と考え併せると、《Vox Angelica》は40年代のアメリカが突きつけた次のような問題意識とともに制作されたことが理解できるだろう。すなわち、20・30年代のヨーロッパで、カタログを見ながらコラージュ作品を制作したのがエルンスト自身であれば、40年代アメリカで彼の作品を素材としてコラージュするのは誰なのか、という問いである。

以上の考察をふまえ、本作品が「文化的置換」や「歴史化」、「商品化」に晒される自身の作品を寄せ集め、カタログ化してみせるという一種の自己の客体化であったことを指摘する。それは、40年代初頭のニューヨーク滞在を経て得られたコラージュのヴァリエーションであると理解することができよう。